

# 造形環境とのかかわりからつくる図画工作科の学習

—第3学年造形遊び「発見！ぬのとのたのしい表現」, 「光とかげと遊ぼう」の実践から—

加藤 潔 己

## 1 はじめに

本年度から、いよいよ新教育課程が実施されることとなった。本校図画工作科の教育課程は、教科提案の項で述べたように「主なねらい」によって題材構成をつくっている。

自立に向かう子ども像をの具現化をめざして、年間指導計画を作成し、新たな題材を開発したり、題材の配列の重点化などしたりしている。特に本年度は、「造形遊び」について、サブテーマの「人やものとのかかわることを大切に」という研究の切り込みで、新たな題材の開発、研究に取り組んだ。

## 2 研究の意図

本年度、研究の中心とする「造形遊び」と造形環境との関係について述べる。

まず、「材料をもとにした造形遊び」についてその題材がもつ特性とねらうものについて、本校図画工作科では次のように考えている。

### 「造形遊び」によってねらうもの

- ・主体的に造形表現する態度 ……*自分の意志, チャレンジ精神*
- ・柔軟に発想する力, 思考力 ……*夢を持つ力*
- ・仲間とともに活動を共有する ……*コミュニケーション能力 (他者, 自己理解)*

### 「造形遊び」の特性

材料などの特徴から、思いついた活動そのものを楽しむことが中心で、結果的に作品になることもあるが、具体的な作品をつくることを目的としない。

「やってみたい, おもしろいことができそう」というモチベーションからスタートし, 素材とのかかわり, その特性を味わい, 試行錯誤するなかで, イメージはわき上がり, 行きつ戻りつを繰り返しながら, 次第に広がり, 深まっていく。はじめにイメージをもち, そのイメージに向かって活動する (作品に向かう) というものではない。

「材料をもとにした造形遊び」の学習は、図画工作の題材の中でも、材料 (素材)、仲間、活動場所と主体的、積極的にかかわる学習活動であり、子どもたちのかかわりそのもの見取りを焦点化しやすいと考えた。次項では二つの実践について、造形環境とのかかわりのあり方やそれに向けての指導・支援のあり方を中心に述べたい。

## 3 実践

### (1) 第3学年「発見！ぬのとのたのしい表現」(造形遊び)

#### 題材について

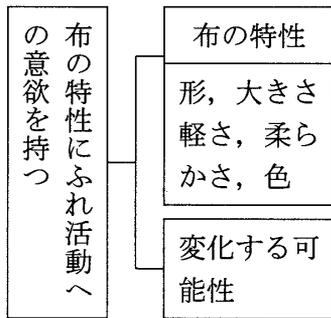
本題材は、布の材質や色、形、その組み合わせの効果などを生かし、子どもたちが主体的に材料とのかかわりながら、布の特徴や場所のようすからさまざまに想像を広げ、思いついた造形活動をする題材である。布はその特性から、ねじる、巻く、結ぶ、通す、おおうなどのさまざまな造形活動が可能であり、また、結んだり、ほどいたり、やり直しやアレンジも繰り返してでき、その変化を次々と試みながら楽しむこともできる。布との活動により、柔軟な発想を引き出し、進んで表現する態度を育むこと、また仲間とともに、目的や面白さ、楽しさを共有する活動のなかで、かかわることのよさを味わい、仲間への理解や共感を広げることが期待できる。

## 指導目標

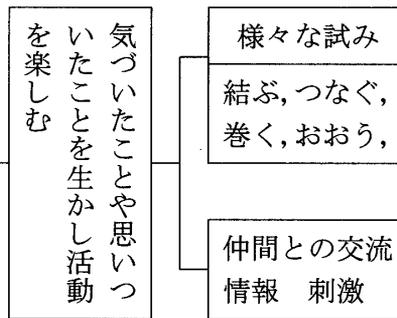
1. 布の快い感覚を味わいながらその特性を生かして造形活動を楽しむ。
2. 布を扱いながら思いついた発想を生かして活動することを楽しむ。
3. 思いを広げながら材料の特性を生かし、活動場所に働きかけるなどしながら自分なりの表現を試みる。
4. 自分や友達の表現を見合い、よさに気づく。

## 指導計画

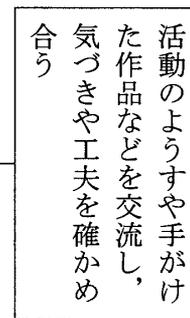
第一次（1時間）



第二次（2.5時間）



第三次（0.5時間）



## 学習の様子

子どもたちが自分で持ってきた布に加え、教師から、伸縮包帯を人数分用意し、使用をすすめた。活動の可能性へのヒントとなるように、また伸縮包帯の特性について、自分から見つけることに興味を持てるように、素材との出会いの場において、伸縮包帯のおもな特性を次のようにクローズアップし、児童に提示した。

- ① 片方を固定し、もう片方を代表の児童が引っ張る場を設けることによる伸縮包帯の伸縮性の提示。（約9メートルの伸び）
- ② 伸縮包帯どうしを結ぶことによってさらに長くつなげることができることの提示。
- ③ はちまきとの比較によって軽さや弾力性の提示。

その後、布のもつ特性を生かし、自分の思いついた方法で活動を発展させる。

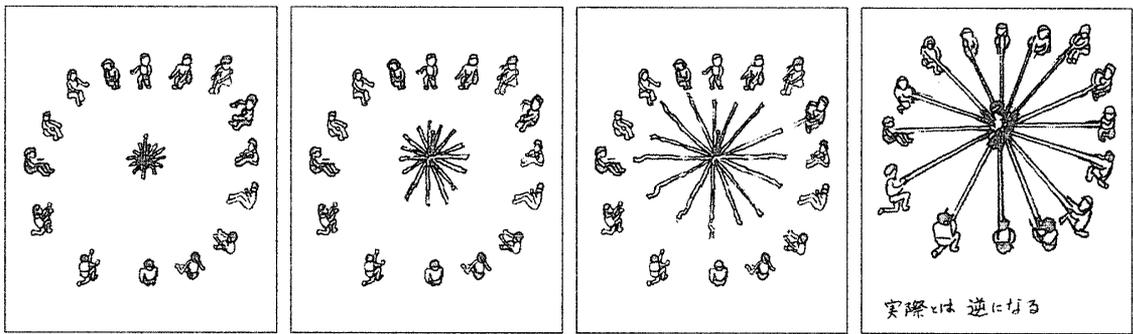
子どもたちは、多数つなぎ、クモの巣のように構成を楽しむ、多数つなぎ、大きな円を作る、体育館にある器具やミニサッカーゴールに結びつけることを楽しむ、自分たちのハンカチやスカーフを結びつける、体に巻き付ける、長く伸ばし、手を離すことによって勢いよく縮むなど伸縮包帯材という材料、体育館という空間とのかかわり、友達とつなげるなどの仲間との活動を楽しむ様子が見られた。



授業のふり返りの中で、次時にやってみたいこととして、次の活動が提案された。

- ・花火のようにしたい
- ・体育館から出てもっと広い運動場でやりたい
- ・運動場の遊具（デラックスジムなど）につなげてみたい
- ・ハンカチやスカーフをもっとつけて動きを見たい
- ・ハンモックをつくってねてみたい

次時の様子



子どもたちの構想のなかで、みんなでやってみたいことのうち、「花火」と「運動場（外）でつなげる」を活動の中心とした。体育館での花火の表現はビデオカメラで録画し、逆送りの映像として見合った。（上図）運動場では5人が伸縮包帯をつなげ輪にし、できるだけ広がることによって、サッカーコート以上の大きさにした。同時に手から伸縮包帯を放すと、きれいな円形をつくりながらゆっくりと縮まっていった。動きのおもしろさ、美しさは、予想以上であり、子どもたちは大きな歓声を上げた。

(2) 第3学年「光やかげと遊ぼう」(造形遊び)

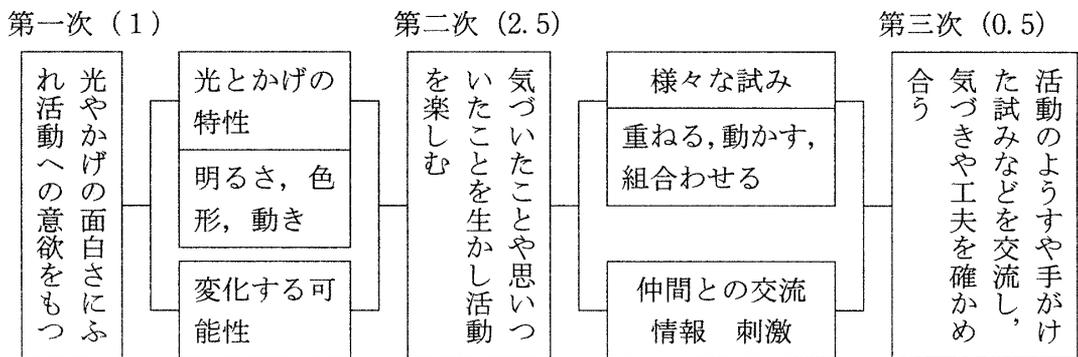
題材について

本題材は、光やかげによってできる形や色、その美しさや面白さから発想を広げて、子どもたちが主体的に光やかげ、そしてそれらによってできる空間とかかわりながら、思いついた造形活動をする題材である。また、この題材は、身近にある素材と光源を使い、様々な形のかげ、色の組み合わせや変化を次々と試みながら楽しむことができ、柔軟な発想を引き出し、進んで表現する態度を育むこと、また仲間とともに、目的や面白さ、楽しさを共有する活動のなかで、かかわることのよさを味わい、仲間への理解や共感を広げることが期待できるとして設定した。

指導目標

1. 光とかげのおもしろさに気づき、積極的に造形活動を楽しむ。
2. 光とかげを映していく中で、その特徴を生かした表現を思いついたり、発想を広げたりする。
3. 光とかげの組み合わせや色の美しさ、形のおもしろさなどを生かす表現を試みながら、効果的に表す。
4. 自分や友達の表現を見合い、よさに気づく。

指導内容と計画..... 4時間



## 学習の様子

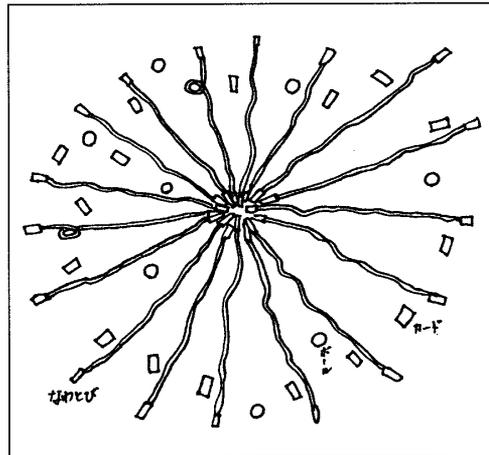
第1次 様々な光源があることを提示し、その中でOHP（オーバーヘッドプロジェクター）を用いて光やかげの面白さとの出会いの場を設けた。

第2次

- 1 持ち寄った光源や素材をもとにいろいろな活動を試みたいという意欲をもつ。
- 2 光やかげの面白さを生かし、自分の思いついた方法で活動を試みる。
- 3 教師から提案された光源等を使った光やかげによるプロジェクトを選び、光の造形遊びを行う。

i) OHC（オーバーヘッドカメラ）大型スクリーン用プロジェクター使用により、体育館での大画面、20メートル以上の距離での投影でダイナミックな活動ができた。

ii) ブラックライト使用により、蛍光色に光る素材との出会いや、素材集め、蛍光ペンや蛍光塗料による描画や構成を楽しむ活動を行う。



特に、子どもたちの持ち寄った市販のなわとび（蛍光色入り）は、ブラックライトの中で、回転させたときの軌跡が、立体の像として浮かび上がり子どもたちの活動を活性化させた。また、伸縮包帯でつくったときと同じように、なわとびによって、花火の造形に取り組んだ。今回は動きではなく、いろいろな色の蛍光色なわとびによる花火ができあがった。

第3次では、主にVTRにより、活動のようすや手がけた試みを見合い、気づきや工夫などを交流した。

## 4 考察

造形環境とのかかわりから学習をふり返るとき、次のようなかかわりの表をもとに子どもたちの造形環境に対してのかかわりの見取りや、教師サイドの評価、支援について整理する。

この表は、学習中での具体的な活動場面で、6つの造形環境との関係を明確にし、指導、支援の重点化を図るものである。重点の度合いを○や◎の記号で表している。また、表の右側には評価規準の欄がある。

かかわりの表（一部を抜粋）

	活 動	造形環境とのかかわり						支 援	評
		材 料 素 材	用 具	場 空 間	ひ と	時 間	情 報		
第2次本時	布の表現の可能性を試す 布の形を変えること、場所に働きかけること、布をもとにした表現を様々に試す。	◎	○	◎	○		○	布の特性について、形の変化や場所への働きかけなどの可能性を、楽しく確かめる場を設定する。  その場所に結ぶ、つなげる、飾るなどの活動、あるいは手に持って動かす、振る、はためかす、空気の流れの中で動く様子を遊ぶ活動など、様々な試みに共感的に言葉かけをする。	
	布の特性を 自分の思いにあった方法を選び、活動場	◎	○	◎	◎	○	○	教師も活動に参加し、活動を発展させることを楽しむ。  友達と共同で活動できることや、そのよさについて、	

生 か し 活 動 を 楽 し む	所にも働きかけながら布の特性を生かした活動をさらに発展する。	○	○	◎	○	助言する。 考えた活動について情報交換の場を持つ。 ◎ 活動を広げる試みをしている児童については全体へ紹介する。
---	--------------------------------	---	---	---	---	--

かかわりの表から

- 1) 造形遊びが材料だけでなく、仲間や空間とのかかわりで学習が進むこと、そして指導者側から、指導のタイミングやポイント、さらに活動をより発展させるための指導の方向性の明確化（情報提供、時間設定）が少なからず見えてきた。
- 2) 造形環境の中で、「ひと」と「情報」の区別が曖昧であった。「情報」には、参考作品、参考資料の提示、インターネット、というもののほかに、指導者（教師）の発問、指示も含むが、それは「ひと」つまり人的環境のなかの指導者（教師）もあり、重なりがある。

大学の先生（若元澄男先生）から

○3H美術教育のすすめ

内発的動機（Heart）から始まり、自ずと頭（Head）をはたらかせ、手（Hand）と体を十分使った造形活動が展開した。遊びこんで夢を持てた……Aくんの夢のある発想「ハンモックみたいにしてねたい」。素材との出会わせ方によって素材がずっと子どもたちのなかにとけ込んだ。人間形成、かかわりが授業に見えた。「しんちゃん」加藤流の情報提供がある。

（実践1）

○造形遊びをきっかけに「美術の教育」と「美術による教育」の推進の示唆を頂いた。

今後、造形遊びのなかで、動く美術、映像として楽しむ可能性（光を取り込んだ美術）を探っていきたい。また、造形遊びや美術に対する理解を求める活動の推進や広報活動として、イタリアのレジイミディア市の造形活動の情報を紹介して頂いた。今後、保護者や市民に対して、映像や記録を通して図工、美術教育の啓発をすることも考えたい。

## 5 終わりに

「材料をもとにした造形遊び」が新しい学力観のもとに提案され10年になる。作品主義が見直され、活動そのものが大切にされてはきたが、その活動によって子どもたちが身につけるべきものとは何かが、曖昧になりやすく、またその身につけるべきものはっきり目に見えるものではないだけに、その理念が十分に理解されずに、実施されている現実があったと考える。今回、造形環境とのかかわりのなかで、学習づくりを考えることによってその成果や課題が見えてきた。かかわりの表の改善を重ね、さらに指導支援のポイントを明確にし、また題材開発も進めていきたい。

参考図書：重要用語300の基礎知識 図画工作・美術科 若元澄男編 明治図書